

風土



新米 神蔵器

炊き上げて新米立てりかがやけり
てのひらの十指ひらけば小鳥来る
本名のおる忌でよし後の月
柿もぐや牧水の歌口に出て
一つ一つ千の夕日の
禅ぜん師し丸ま柿る

行く水の音より速し秋の風
十方へ走りて落ちず芋の露
小鳥来る六人乗りの乳母車
大根蒔くしのつく雨をやりすごし
マラソンのどんでん返し芋嵐
ある夜の月金木犀銀木犀
たましひのしばらくあそぶ瑠璃揚羽



竹間集

同人作品



秋風
岩木茂

息に火の付きて迎火立ち上がる
精霊舟鷗引き連れぬたりけり
閻魔大王鼻ふくらます残暑かな
ひぐらしの声の奥より盆の月
百日紅墓に玩具の忘れられ
明史碑の雀加へて稲雀
秋風のうしろ姿の柳かな

鶉わたる
相沢有理子

食べあるき番組に倦む極暑かな
蟬しぐれ玄関の扉をうしろ手に
風の森狐の提灯咲きそめぬ
あめんぼにしぼし足止む旅半ば
ただ暑くのんべんだらりと昏れゆけり
女生徒と林間の餉や鶉わたる
墓域出るナツプザツクに蒲の絮

路刈
小林輝子

子規が越え歩荷が越えし樵峠
天平の女ふくよか絵七夕
齒黒めの立姿など絵灯籠
路刈の鎌に曇りのなかりけり
家出づる一步に匂ふ葛の花
底紅の筒巻きはじむ夕青空
檀那寺より踵き来たる秋の蝶

蟬泣く

小野寺節子

清貧の松に蟬泣く敗戦忌
日本の思はぬ被災身に入むる
魂祭休めぬ施設ボランティア
八月や俳友施設に入居せり
めまぐるしき天変地異や魂を待つ
桂郎の一句載せある秋扇
難聴弱視の吾れに沙汰なし秋の声

醉芙蓉

田村すゝむ

一ち日の命を咲かす醉芙蓉
醉芙蓉妻亡き思ひ在る思ひ
櫓も櫓もなき流灯を放ちけり
闇と云ふ水に道あり流灯会
彼の岸に待つ人のあり流灯会
坂町の日暮れ待たる風の盆
醉芙蓉咲かす八尾は坂の町

秋の蟬

瀬戸

悠

傘立てに日傘一本忌明けぬ
夏百日生き身なだめて生き通す
調理場の湯気流れくる芙蓉かな
鬼灯を鳴らして母を恋しがる
九月来る夕日の中の大聖堂^{カテドラル}
秋蟬や墓山海へせり出せり
家族葬総勢九人秋の蟬

ひぐらし

塩田

博久

鳩の脚舗道に赤き暑さかな
てんと虫息子に道理説かれをり
のうぜん花中也を想ふ寺の縁
京菓子の名に惹かれ買ふ葉月かな
赤とんぼ子らの帰りし校庭に
病院を出てひぐらしを振りかぶる
団栗や林の奥に絵画館

時雨月

島谷 征良

推敲を重ねよと声桂郎忌
冬立ちて山はいよいよ錦かな
ひきつづく十一月の夜寒かな
空と語るごとくに白し帰り花
綿虫の横にとぶ時ありにけり
熱きお茶いくど茶の花日和かな
石露の花大いなり磯近ければ
一灯をのこす社や初時雨
みちのくの旅をおもへば時雨かな
俳諧に惑ひ惑はず桃青忌

山河集

同人作品



神蔵
器選

女子大に隣る大寺合歓開く

点さるる銀の燭台夜の秋

雲を吐く片富士の裾早稲は穂に
石崎 浄

銀河の尾一爆となり船出せり

施餓鬼寺月影杉に縞となす

十六夜にわが名囓ませしシユレッダー
夜を通し玻璃に火蛾付く坊泊り

夏稽古面の長紐固く締め
上村 萼子

かなかなのこ糸松籟に解けゆけり

鬼灯やかかの世この世の道標

結界の石に蜻蛉来て止まる
青空に放つ白鳩原爆忌

近藤幸二郎

月明の砂丘を奔る砂の音
古書街に涼しき金の背文字かな
先斗町鱧切る音に昏れにけり
夜の秋の蠟涙溜まる観世音
野仏の天蓋と咲く百日紅

内藤 静

庭下駄の揃へてありし良夜かな
二千余の本を手放し露の家
ひぐらしの一語が一語誘ひけり
川波のシユプレヒコール広島忌
幾多郎の全九十句秋立ちぬ

間島あきら

海一つ平らかに置く土用入
坂の上の雲のくれなゐ青葡萄
夕立来る十番館の喫茶室

高浜七年祭

岩木 茂

あぢさゐの一花に海の引き締まる
半畳の田に始まれる青円波
鳥を追ふ眼に万緑が濃く淡く
浜昼顔砂の火照りを花にして
夕虹の根に蛸壺を投げ入るる
月見草船は小舟を曳き戻る
磯止めや祭の松を伐り出して
祭神の巖かな闇夏木立
祭来る玉蜀黍に髭の出で
式年祭濱焼鯖が美味くなる
畏みの神楽の小太刀光りけり
おひねりの飛んで曳山踊りかな
御旅所の長老を噛む獅子頭
笹干しの魚置かるる涼み台
御田植の踊りに夕立来てゐたり

第 36 回桂郎賞入選

素^す戔^さ鳴^のの神輿^おに就きて声嘖^ららす
還幸^のの汐^{した}たたる足袋^{五百}
涼風^や見渡^す限り日本海
ぬばたまの夜の瓦^に弾む喜雨
祭過ぐアサギマダラは沖へ翔ち
陰干しの袴^の祭り疲れかな
空蟬^やきのふはずでにセピア色
梅雨^{明け}や波止^に大敷^お網^お拵^しげたる
浜茶屋^の旗^の「氷」のいちご色
海風^を豊かに使ひ天草干す
黒鯛^のいのち目方で量らるる
夜光虫^掬へば砂^が掌^にありて
夕菅^を窓^辺に星^の風^を待つ
流離^仏多^き若狭^や鯖火^燃ゆる
美^しき鯖火^に夜^の明^けきたる

与謝郡

田中佐知子

麦秋や出土の土器に指のあと
墳山の階夏雲へ続きをり
夏蝶の迷ひ込んだる埴輪館
騒雨去り杉青々と匂ふなり
帽脱ぎて視界広ぐる夏野かな
峰雲の沖へ一直線の敷^あ網^み
潮騒の迫つて来たり蟬の穴
拝殿の千木高々と御田植
耳元に揺らす鈴萱安寿塚
星涼し汐汲浜を舟離り
山開き献酒の「酒呑童子」かな
鬼やんま天女の里に踏み入りぬ
椅子翔ちて滝見の蝶となりけり
蜘蛛の糸ひと筋よぎる滝の前
祭来る籠の帯締め囃子衆

第 36 回桂郎賞佳作

日盛のはたと止みたる機の音
三伏の盛り塩きらと旅籠かな
糸巻を風鈴にして縮緬屋
風鈴や縮緬格子糸格子
施薬寺に蕪村の屏風涼しかり
葺替へし萱の匂へる涼夜かな
七夕笹蕪村の母の生家かな
朝顔や蟹の一戸に忌中札
盆過ぎの波が小石を引き戻す
橋立は遙かや白花曼珠沙華
秋草の中なる牛の水飲み場
蓮の実の飛んで蕪村の与謝郡
鳥渡る丹後王国墳に見て
墳山の空明け渡し燕去ぬ
秋燕帰りしあとの水平線

◇特別作品◇(抄)

日々好日

鈴木みのる

夏薊大河はゆるく流れけり
暮れてなほ紫陽花に見る変化かな
砦村泰山木の花に逢ふ
夏の庭土に命の力あり
足とどむ古刹の旅の百日紅
夕立や木木の緑のいよ濃く
微動だにせぬ大墓に合掌す
夏空に伸びて極まる杜の木木
夕焼に世界遺産の富士染まる
日日好日かなかな心の森にかな

風土独語／神蔵器



盆花とならぬ朝顔咲き揃ふ

林 いづみ

御母堂は今年新盆である。七月十二日、旧では八月十二日には草市が立ち、盂蘭盆に使う品々や鬼灯などが売られ、特に東京では七月六／＼八日に開かれる入谷の朝顔市が有名である。そして、その頃、作者の家の庭にも朝顔が咲きはじめている。朝顔は亡くなったお母さんの大好きな花であった。

朝顔は朝というより、早晩に青・紫・白・紅・絞りなど、それぞれ大輪の花を咲かせるが、太陽が昇りきる前にはほとんどしぼんでしまう。ほんの短い時間、朝顔の第一花は全身全霊を打ち込み、まさにみなぎる生命の讃歌、清らかな無垢の美しさにかがやいている。

「盆花にならぬ」と言ったのは、写実と共に、写実を越えた作の自在、独白の感性である。それは利休が庭の垣根に咲いた朝顔をことごとく筆り取って、ただ一花の朝顔をもって秀吉を迎えた創作上の故事にも似るが、こちらは第三者の勝手な想像は望ましくない。お母さんが本当に愛し求めたのは朝顔の花、そして、それは戦中、戦後から生きぬいて来たひたむきなお母さんの姿、人生、夢とほんのちよっぴり秘密もあったかも知れない。

銀河の尾一瀑となり船出せり

石崎 淨

一読して宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を思った。『銀河鉄道の夜』は、死後未定稿のまま発見されたそうだが、たちまち有名になり絶賛され、賢治の代表作になった。今さら何もいうことはないが、粗筋を少し言えば、

主人公ジョバンニは病気の母親のために、その日、まだ配達されていない牛乳を取りに出掛ける。ところが、「今、分るものがない」と言われ、それではあとでまた来ますといつて牛乳屋を出た。

ジョバンニは何とも言えず淋しくなつて、黒い丘へと、露の降りかかった林の小道をどんどん登って行つた。真つ黒な林を抜けるとにわかには空ががらんと開け、天の川が南北へ渡り、頂の天気輪の柱も見て取れ、そこら一面に花が咲いていた。ジョバンニは冷たい草の上に体をあずけた。

何べんも目をこすつたジョバンニは、自分がさつきから、ゴトゴトと走り続ける小さな列車に乗っていることに気がついた。同じ列車に友人のカムパネルラが座っていたり、突然「ハルレヤ、ハルレヤ」の合唱の音が響き、車室の旅人達はみな立ち上がり、銀河の河床に立った白い十字架に祈りを捧げていた。

さまざまの出来ごとに会い、さまざまな体験をしながら列車は進み、南十字に着き、多くの人が下車して、友人のカムパネルラと三人だけになつてしまつた。「ああ、あそこの野原はなんと

れいなんだろう。あそこが本当の天上だ。あつ、僕のお母さんがいる。カムパネルラの叫びに、「カムパネルラ、一緒に行こうねえ」とジヨバンニが振り向くと、そこにはもう誰も居なかつた。ジヨバンニは叫び泣き、やがて「早くお母さんに牛乳を届けよう」。一目散に走り出した。

「船出せり」は作者石崎浄さんの実兄、山口青邨先生のお墓の東禅寺の御住職とわずか六ヶ月違いで旅立たれた次兄のお二人の船出であろう。かなしくも美しい鎮魂の句である。

(以下略)



風土集



神蔵器選

一鉢の鷺草家居ゆたかにす 東京

林 いづみ

凶書館の七夕竹の字のをさな
まつさらな心となりぬ滝の前
風鈴の紐・短冊を替へもして
盆花とならぬ朝顔咲き揃ふ
鹿の子の眼篝火映しをり

神奈川

石井 秀一

炎昼や干し綱匂ふ船溜り
夏蝶の翅を帆にして雨宿り
思ひつきり夏帽振りて別れけり
ふる里は今ある所遠花火
秋の田は白鷺の羽根幣にして

京都

杉本葉子

ifといふ歴史は悲し原爆忌
極楽へ船漕ぎ出でる西日かな
床の灯の鴨川の水に溶け込みぬ
墓石には一期一会と精霊会

大和より宇陀に回りしはたた神 五條

上辻 蒼人

早かな草々のみな葉巻癖
炎帝に蔵王権現眼が赤し
向日葵はポルトガル産赤味濃し
峰々の寝そべつてぬし残暑かな
木斛の花着る門柱太きかな

東京

柿沼 盟子

片足を上げ鹿の子の物見かな
道を分く白線一本灼けてをり
草市に雨後のにはひのありにけり
四阿の柱不ぞろひ花木権
裏返しの袖を引き抜く敗戦日

津山

生田恵美子

喜雨きたる夫の塩飴缶に減り
雲の峰人の消息ふと思ふ
襖一つもらはれて行く炎天下
脚高きベネチアグラス夏逝けり